

## 六たび歌よみに与ふる書

連載第六回

## 正岡子規

いただいたお手紙の御書面を見ると、私の意図するとこゝろを誤解されています。ことに変なのは、御書面中四、五行の間に矛盾撞着があります。はじめに「客観的景色に重きをおいて詠むべし」とあり、次に「客観的ののみ詠むべきものとも思われない」云々とあるのはいかがでしょう。私は客観的ののみ歌を詠めと申し上げたことはありますが、客観に重きを置くと申し上げたこともないのですが、このお手紙の方は、結果的に私の意に近いように思われます。

「皇国の歌は感情を本として」とは何のことを言っているのでしょうか。詩歌に限らずすべての文学が感情を本とすることは、古今東西何も違いがありません。もし感情を本としないで理屈を本としたなら、それは歌でもないでしょうし、文学でもないでしょう。ことさらに「皇国の歌は」などと言われるのは、歌よりほかには何も知らない歌よみの言葉かと怪しまれるでしょう。「いつの世に何人が、理屈を読んでは歌ではないと決めたのか」とは、驚いた御質問です。理屈が文学にあらずとは、古今の人、東西の人、

屈の限界は実際には判然としていないものではないという御論は、ご尤もです。それゆえに、善悪可否巧拙と評するのも、もとより画然とした区別があるのではなく、巧の極端と拙の極端とは毫も紛れるものではありませんが、巧と拙の中間にあるものは巧とも拙とも申し上げられないものです。感情と理屈の中間にあるものは、この場合に当たるもの

正岡子規



「同じ用語同じ花月においても、それに対するその人の觀念と古人のと相違することは珍しくはない」云々とおっしゃることは、もちろんのことですが、そんなことは私が論ずることと少しも関係がありません。今は古人の心を付度する必要はなく、ただここでは、古今東西に通ずる文学の標準（自らこうである）と信じる標準ですが、をもつて文学を論評する者です。昔は風帆船が早かった時代もありまし

たが、蒸気船を知った眼から見れば、風帆船は遅いというのは、至当の理であり、貫之は貫之の時代の歌の上手とするものの、前後の歌よみを比較して貫之より上手の者はほかにたくさんいると思えば、貫之を下手と評することもまた至当でありま

ことごとく一致している定義であつて、もし理屈をも文学であると云う人がいたら、それはおおかた日本の歌よみでありましょう。

客観主観感情理屈の語について、あるいは私の意図するところを誤解されたのではないのでしょうか。まったく客観的に詠んだ歌でも、感情を本としているのは言うまでもありません。たとえば橋の袂に柳が一本風に吹かれていて、いうことをそのまま歌にしようとするには、元々この歌を作るということ自体において、この歌は客観的であると同時に、元々歌を作ろうとすることが、この客観的景色を美しいと思つた結果なのですから、感情に本づくことはもちろんで、ただうつくしいとか、綺麗とか、うれしいとか、楽しいとかいう語で表すか、表さないかだけのちがいにすぎません。

また主観と申すものうちにも、感情と理屈の区別があります。私が排斥するのは、主観中の理屈の部分で、感情の部分ではありません。感情的主観の歌は客観の歌と比べて、この主客両観の相違の点より優劣を言うべきではなく、私はまた客観に重きを置く者でもありません。ただし、和歌俳句のような短い詩では、主観的なものよりも客観的なもののほうにいい作品が多いと信じていますので、客観に重きを置くというのも、このことを意味すると見れば差し支えはないでしょう。また主観客観の区別、感情理

しょう。歴史的に貫之を褒めるならば私もあながち反対ではありませんが、今現在の論は歴史的にその人物を評することではなく、文学としてその歌を評することが目的です。「日本文学の城とも言うべき国歌」云々とは何事ですか。代々の勅撰集のようなものが日本文学の城壁ならば、実に頼りにならない城壁で、このような薄っぺらな城壁は、大砲一発でめちやめちやに砕けてしまうでしょう。私は国歌を破壊し尽くすという考えで言っているのではなく、日本文学の城壁をも少し堅固にしたいと言っているのです。外国の髭づらどもが大砲を発とうが、地雷を仕掛けようが、びくともしないほどの城壁にしたいというのが心に願っているところです。

しかるにこのような私を助けてこの心願を成就させようとする支持者は天下に一人もなく、数年来鬱積沈滞しておりました。最近ようやく出口を得たかのように、前後錯雑序次倫なく、大言疾呼、我ながら狂ってしまったかと思うほどの状態です。傍らより見れば、きつと狂人の言葉と蔑まれることでしょう。なお、このたび新聞の余白を借りることができたのを機として、自分の思うところや考えを思いのたけを述べてみたいと思つています。それだけでは私の考えもわかつていただけないと思うので、私の歌もいっしょに並べて批評をしていただきたいと思うところがあります。これもあるいは先輩諸氏の怒りに触れて差し止められ

るようなことはないかとそのみを心配しております。心配、恐懼、喜悅、感慨、希望などに悩まされて、従来の病体がますます神経の過敏を招き、日頃睡眠に不足を生じていることから、愚とも狂ともお笑い下さるべきかのような状態です。

従来の和歌をもつて日本文学の基礎とし、城壁を為そうとするのは、弓矢剣槍をもつて戦おうとするのと同じで、明治の時代に行われるべきことではありません。現代は軍艦を購入し、大砲を購入し、巨額の金を外国に出すのも、畢竟日本国の守りを固めるためにほかなりません。そうであれば、わずかの金額で贖うことのできる外国の文学思想などは、続々輸入して日本文学の城壁を固めたいものです。私は和歌についても旧思想を破壊して、新思想を注文するという考えなので、用語は雅語、俗語、漢語、洋語など必要次第用いるつもりです。詳しいことはまた後に譲るとします。

最後に追い足すと、伊勢の神風、宇佐の神勅云々の語があります。文学において合理非合理を論ずべきという立場ではありません。ですから非合理は文学ではないと申し上げたこともありませぬ。非合理のことで、文学にはおもしろいことが少なからず存在します。私が写真と申し上げるのは、合理非合理事実非事実を言っているのではありません。油絵師は必ず写生に依るものですが、それによつ

ンビでハロウインを楽しんだというだけで、他には何の感興もない風俗歌にすぎない。「極楽トンボのお幸せが何なの?」「子供が本当にゾンビになる心配はないの?」と野次を飛ばしたくなる。

「看護師が赤ちゃん言葉になってゆく程度で病の重さを計る」永田と馬場が☆を付けている。確かに病院の一風景には違いないが、ここには病人自身の痛みや苦難に対する思いはなく、ただ看病する側のかける言葉で病の重い軽いが変わっていくという現象の変化を捉えているにすぎない。「よく外側のことに気がつきました。でも少しは病人の痛みや気持ちを汲んであげてくださいね」と言いたくなる表面歌にすぎない。

「貴婦人のような心で行きました人生初のアフターヌーンティー」これは馬場、高野が☆を付けている。「貴婦人」などという言葉は短歌には合わない。階層や身分や地位、貧富を超えて自然の中で等しく包まれている生存を感受するときに、一体こういうものが何になるのか。アフターヌーンティーなど無縁の人はたくさんいる。こうした感慨は日記や手帳に付けておけばいいので、わざわざ歌にしてまで他人に告げる必要はない。多くの人が共有すべきものは含まれていない。

「さつまいもほりコンテスト一等のどんぐりの金メダルをもらう」馬場選。金メダルはもらいすぎ。

て神や妖怪やあられもなきことをおもしろく描いています。しかし神や妖怪を描くにも、もちろん写生に依るもので、ただありのままを写生すると、一部一部の部分写生を集合するだけのものになってしまいます。私の写真も同様のことです。これらは大きな誤解です。

(明治三十一年二月二十四日)『日本』掲載

## 文芸思潮 短歌季評

久々に朝日新聞の日曜歌壇に戻ってみた。十二月三日のものだが、まったく進歩も変化もなく、ひどい歌が並んでいて、こんなものが短歌かと、侮蔑を超えて腹が立ってくる。選者は永田和宏、馬場あき子、佐佐木幸綱、高野公彦と代わっていない。☆印が付いているのが、どうやら「いい歌」らしいので、それらをすべて拾い挙げてみる。

「カモミールティーを包み込むときの手よまだ愛があるじゃないか」

これは御丁寧に、永田、馬場、高野(敬称略)の三人が☆を付けている。この作は歌想そのものが詠むに値しない駄歌である。

「ハロウインの帰りにママと手をつなぐ幸せそうなら歳のゾンビ」

永田、佐佐木二人が☆を付けているが、子供の仮面がゾ

「品薄のどんぐり求め買い出しに行ったつもり母親の熊」高野選。「買い出し」という言葉を持ち上げてうまく重ねたつもり駄作。こういう歌に腹が立つのは、熊がなぜ食物不足になるのか、何の考慮もせず、またこの母親熊がどうなるのか、何も叙述せずに言葉の遊びに終始している姿勢である。人間の安逸に乗った無責任な態度が透ける。

朝日歌壇はやはり日本の短歌をダメにしている。日本の現歌壇を象徴している惨状に、さらに落胆を深くした。

むしろ地方の徳島新聞の歌壇の方が、はるかにいい歌がある。松田和美氏提供の九月一八日の徳島新聞から拾ってみる。

「部屋のかど歩行器押して来る母を隠れて待って汗を拭くなら」(アサガオ)

「夜露うけ光る梅の実返しつづ年に一度の手仕事終える」(佐金淳子)

「今日訪へば今日の河あり流れをり紅き一会の小石を拾ふ」(杉崎麻沙樹)

「水濡れの布団に命守りしと亡母は語りき空襲の夜を」(吉井のり子)

「朝露にこまくさの花頭へをりわれ乗鞍岳をやつと果たせり」(連記かよ子)

「もくもくと野仏のまはり草をぬく媪の背な深く礼せり」(新居友春)